

科学的社会認識を育てる授業研究

I 主題設定の理由

社会科で指導する内容は、社会認識である。それを科学的に考えていくところに科学的な社会認識がある。その過程においては、事実認識・関係認識・主体認識がある。それぞれにどのような資料を使い、どのような手だてをとっていくかが大切である。この認識力を養うことが社会科のねらいの一つである。基礎・基本が習得され、ある単元で学んだことと身につけた認識力が他の単元にも応用できること。このことこそが、科学的な社会認識を身につけたということではないだろうか。

II 研究の内容

1 小学校部会

科学的社会認識を育てる授業研究を支える観点として「楽しい社会科授業の創造」「習得型の社会科授業」「資料をいかした社会科授業」「活用型・探究型の社会科授業」の4点を設定した。実践をもとにした研究を進めるために、研究授業における事実をもとに研究を進める。それとともに、各部員が自分の実践を持ち寄り報告することで、日々の実践につなげられるようにした。

(1) 授業実践研究（日下部小）

「発見 昔のくらし」 4年 向山 潤教諭

(2) 実践報告・情報交換

(3) 臨地研修 わだつみ平和文庫（甲州市）

2 中学校部会

本部会では「科学的社会認識」を、事実から出発し原因と結果の考察から一般的な法則を見いだすことと解釈した。社会で起こっている出来事は偶然ではなく、様々な要因が複雑に絡み合って起こっている。その事実を子どもたちに具体的なデータや資料を通して考えさせいくことが大切になってくる。そして、最終的にはそれを現実に生かしてこそ「科学的社会認識」の意義があるものとする。今年度もこの考えをもとに研究を進めてきた。～身近な資料を生かした授業研究～をサブテーマに設定し、身近な資料を通して生徒の興味・関心を高め、科学的社会認識を育てていく授業作りをめざしてきた。

(1) 科学的社会認識を育てる手立てについて理論研究を深める。

(2) 臨地研修と学習会を行うことにより、地域の資料の教材化を図る。

ア 山梨日立建機（南アルプス市）

イ 勝沼宮光園（甲州市）

(3) 実践授業研究（山梨南中）

歴史的分野（1年）身近な地域の人物を調べよう～根津嘉一郎～ 武井晴彦教諭

Ⅲ成果と課題

1 小学校部会

- (1) この部会で研修して、各先生方の実践を見ること、知ることができたので、授業の引き出しが増えて心強く思えた。
- (2) 臨地研修で、身近なところに歴史的に大変意義のある場所があることを知った。
- (3) 研究授業で豊富な資料や地域人材を活用した授業実践ができた。
- (4) 授業案検討や研究授業を通して、教材に対する理解が深まった。
- (5) いろいろと調べさせること、体験させることの楽しさや大切さがわかったが、さらにそれが、今の自分に、社会に、どうつながっているのか、深く社会認識力をつけるにはどうしたらよいか研究を続けていったらよいと思った。
- (6) サブテーマが多く、研究の方向性を絞り切れていない。
- (7) 部会として山梨市・甲州市の地域素材の掘り起こしや資料集めに取り組んだらよいのではないか。
- (8) 小中連携をはかることも必要である。冬季の研究授業を隔年で小・中で行い、お互いの学習の様子を見合うことも大切である。

2 中学校部会

- (1) 今年度も年度当初に宮本校長先生から「科学的社会認識」についてのお話をいただき、今年度の社会科部会研究の指針とすることができた。
- (2) 新教育課程の学習会を窪田教頭先生よりしてもらい、年間計画や新課程での授業作りのイメージを作ることができた。
- (3) 授業の提案を武井先生にってもらい、サブテーマにある～身近な資料を用いた授業研究～を実践してもらった。郷土の偉人ということで、生徒たちも興味・関心を持ちやすく意欲的に授業に取り組み、研究を深めることができた。
- (4) 臨地研修では、世界で活躍する雨宮さんに話を頂き、現代の世界の現状を改めて感じる事ができた。
- (5) 新教育課程について来年度具体的な授業に向けた学習の場を設けられるとよい。
- (6) 臨地研等で得た教材をもとにして共同授業案作りを進められるとよい。また、そのような資料を活用した実践報告ができるように工夫する必要がある。
- (7) 小学校との連携を図り、相互の交流の機会が作れるように工夫する。
- (8) 地域教材で埋もれているものを掘り起こし、授業に活用できるようにする。

(小学校部長 橋本 尚一 加納岩小)
(中学校部長 山本 裕 山梨北中)